

金峰山修験道遺跡

— 平成11年度～平成13年度発掘調査報告書 —

川上村教育委員会



金峰山修験道遺跡

—平成11年度～平成13年度発掘調査報告書—

川上村教育委員会



遺跡遠景



遺跡遠景

序

村内には数多くの遺跡をはじめとする文化財が存在し、その文化財を保護し後世に伝えて行くことは私たちに課せられた義務であろうかと思われます。また、過去から連綿と積み重ねられてきた私たち郷土の歴史や文化について解明する手掛かりは、埋蔵文化財の調査によっても明確に得ることができます。目的を持った調査、研究を進め、郷土の歴史を明らかにしていかなければなりません。そこで、今回は文化財保護委員会を中心に、川端下の金峰山修験道遺跡を調査することとなりました。

この遺跡は、平成5年に学術調査が行われ、蔵王権現半肉像や鏡、銭貨、陶器片などが多数出土しており、貴重な遺跡と確認され、平成8年に村の史跡として指定を行いました。発掘調査の当時から遺跡範囲の広がる可能性が指摘されており、平成11年度から二度目の発掘調査を行うこととなりました。今回の調査によっても銭貨や陶器片、キセル等が出土し、参道が確定されるなどの成果がありましたが、どのように利用された場所だったのか、施設はあったのか不明な点も多く残されました。今後も、調査・研究を継続し遺跡の究明と共に、中世から近世における川上村の歴史や文化について考察していく必要があるものと思われます。

終わりにになりましたが、金峰山修験道遺跡の保存につきましてご理解いただいている地権者の皆さんをはじめご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

平成14年3月

川上村教育委員会
教育長 由井清幸

例 言

1. 本書は、長野県南佐久郡川上村大字川端下に所在する金峰山修験道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、川上村文化財保護委員会の調査研究の一環として行われた学術調査であり、遺跡範囲の確認及び金峰山修験道の解明を目的とした発掘調査である。
3. 発掘調査及び資料整理は川上村教育委員会が担当した。
4. 本書の編集及び執筆は川上村教育委員会の責任の下、長崎治が担当し、文化財保護委員が監修した。
5. 写真撮影及び実測、トレースは長崎治が行った。銭貨の拓影は上田貢が行った。
6. 金峰山修験道遺跡の資料は全て川上村教育委員会で保管している。
7. 調査に際して下記の方々からご協力を頂いた、記して感謝申し上げる。

井出 由太郎（地権者）・原 照人（地権者）・市川隆之（長野県埋蔵文化財センター）

目 次

序

例 言

目 次

1. 調査の概要	1
1) 調査の概要	1
2) 調査の方法と経過	1
3) 遺跡の立地	4
4) 基本層位	4
2. 発見された遺物	4
1) 遺物分布	4
2) 出土遺物	6
3. ま と め	9

1. 調査の概要

1) 調査の概要

- | | |
|---------|---|
| 1 遺 跡 名 | 金峰山修験道遺跡 |
| 2 調査の場所 | 長野県南佐久郡川上村大字川端下398-156 |
| 3 調査の期間 | 発掘調査 1999年10月21日・11月9日・11月30日
2000年5月17日・5月19日・5月24日・6月1日
10月17日・10月18日
2001年5月28日・10月24日
整理・研究 1999年11月30日～2002年3月 |
| 4 調査の目的 | 遺跡範囲の確認及び金峰山修験道の解明 |
| 5 調査概要 | ①遺跡の時代 近世
②遺 構 焼土痕
③遺 物 銭貨46点、陶器片14点、土器片1点、小珠1点、
キセル2点、鉄製品1点、海石1点、水晶片2点、
総点数68点 |
| 6 調査体制 | 調 査 主 体 川上村教育委員会・川上村文化財保護委員会
調査担当者 長崎 治
調 査 員 中島美喜衛・由井 港・由井 隼人・上田 貢
関 基・林 市四郎・山中 重徳・川上 憬
原 好正・由井 幸憲・由井 和水・吉沢 靖
林 岩（以上文化財保護委員会）
事 務 局 由井 清幸（教育長）
井出 茂夫（教育振興課長）
長崎 治（教育振興係） |

2) 調査の方法と経過

本遺跡は、平成4年11月に川上村文化財保護委員会の踏査により、石積を発見し、文献、伝承から金峰山神社の大鳥居跡であることが判明した。その翌年、島田恵子氏の協力を得て川上村教育委員会が発掘調査を行い、蔵王権現半肉像、鏡、銭貨、キセル、陶器片などの遺物や鳥居礎石、建物址などの遺構が検出された。その当時より、建物址から鳥居跡までの西側にテラス状の段があり、その場所に遺跡の広がることが指摘され、今回、川上村教育委員会と文化財保護委員会による発掘調査を行うこととなった。

発掘調査にあたっては、平成5年に調査が行われた地点の南側に接するテラス状の地点に、幅1.5mのトレンチを南北方向と東西方向に設定し、出土状況に応じて拡張する方法によって行った。調査は、まず、手掻ジョレン等によって表土を除去した後、移植ゴテで慎重に掘り下げを行った。遺物は全点の出土位置



発掘調査風景

を記録し、発見順に通し番号をつけた。

平成11年度の発掘調査は、10月21日と11月9日の2日間行い、11月30日に実測図の確認作業を行った。

10月21日は、トレンチの設定を行った後、表土の除去、掘り下げを行い早くも陶器片が出土し、この日は合計13点の遺物が出土した。また、基本層位の確認をおこなった。この日の調査参加者は、中島美喜衛・由井港・由井隼人・関基・山中重徳・川上憬・原好正・由井幸憲・長崎治であった。

11月9日は、前回の遺物分布を参考にして、北東側と南西側を拡張した。拡張部分からも多くの出土があり、15点の遺物が得られた。また、遺物分布図の作成を行った。この日の調査参加者は、中島美喜衛・由井港・由井隼人・山中重徳・川上憬・原好正・由井幸憲・林市四郎・由井和水・上田貢・長崎治であった。

11月30日は長崎のみで行い、図面の確認などを行ったのみで、本年度の作業は終了した。

平成12年度は、5月17日より再開し、昨年度の調査地点を拡張することとした。17日には銭貨、陶器片など11点が出土した。この日の参加者は、中島美喜衛・由井港・由井隼人・山中重徳・原好正・由井幸憲・林市四郎・上田貢・林岩・長崎治であった。

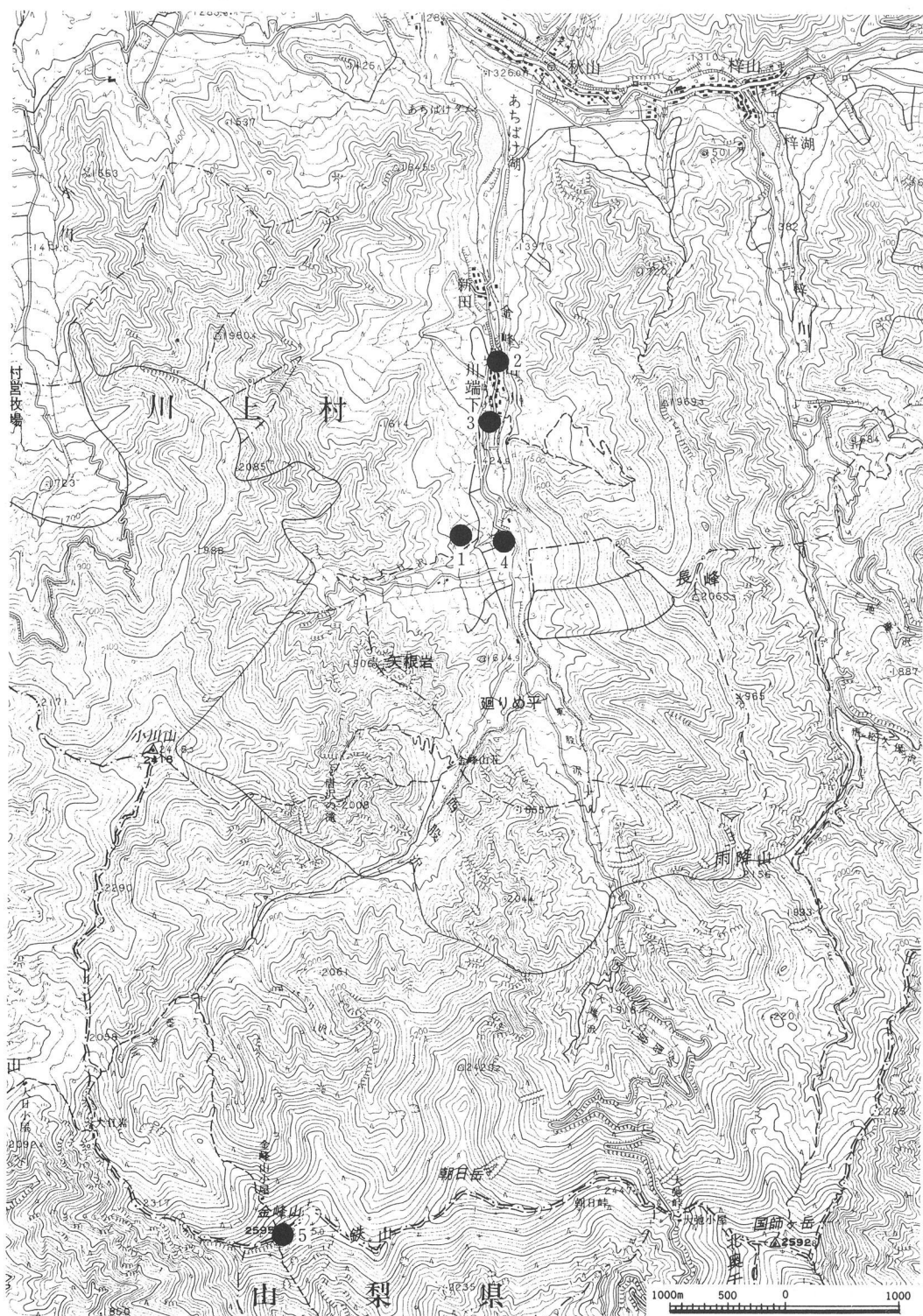
5月19日も引き続き拡張を行い、小珠が1点出土した他、銭貨、陶器片など11点が出土した。また、遺物分布図の作成を行った。この日の参加者は、中島美喜衛・由井港・由井隼人・山中重徳・原好正・由井幸憲・林市四郎・由井和水・長崎治であった。

5月24日は、精査を行いつつも拡張を行い、銭貨、陶器片8点が出土した。この日の参加者は、中島美喜衛・由井港・由井隼人・関基・山中重徳・原好正・由井幸憲・林市四郎・上田貢・由井和水・長崎治であった。

6月1日も精査と拡張を行い、銭貨など5点が出土した。この日の参加者は、中島美喜衛・由井港・関基・山中重徳・川上憬・原好正・由井幸憲・林市四郎・上田貢・由井和水・長崎治であった。

10月17日、夏季の間、休止していた調査を再開する。北側部分の拡張を行い、6点の銭貨が出土した。この日の参加者は、中島美喜衛・由井港・関基・林岩・原好正・由井幸憲・由井隼人・長崎治であった。

10月18日は、調査範囲の精査を行い、特に遺物の出土等なく、遺物分布図の作成を行い、本年度の調査を終了する。この日の参加者は中島美喜衛・由井港・関基・山中重徳・原好正・由井幸憲・上田貢・由井



- | | | |
|-------------|--------------|----------|
| 1. 金峰山修験道遺跡 | 2. 大鳥居（現在地） | 3. 金峰山神社 |
| 4. 大日堂（現在地） | 5. 金峰山頂及び五丈岩 | |

第1図 遺跡の位置

和水・長崎治であった。

平成13年度は、10月24日にこれまで調査してきた南側のテラス状の部分にトレンチを設定したが、遺構、遺物とも検出されなかった。この日の参加者は中島美喜衛・関基・林岩・由井港・由井幸憲・由井和水・長崎治であった。

3) 遺跡の立地

本遺跡は、長野県南佐久郡川上村大字川端下に位置し(第1図)、遺跡のすぐ南側に金峰山川の支流となる大日沢が流れる。付近は金峰山川の浸食による谷地形で、小川山の東斜面にあたる。また、遺跡の南側に花崗岩の侵食によって形成された矢根岩があり、独得の景観を呈している。金峰山頂までの水平直線距離は約6kmあり、大日沢を越えて最初の緩斜面である。遺跡の付近には大鳥居や大日堂など位置しているが、両者とも移転後の位置であり、鳥居は本遺跡内にあったことが確認され、大日堂についても大日沢をはさんで本遺跡の対岸付近にあったことが想定されている。また、周辺地域は金や銀などの鉱床が存在し、戦国期の武田氏による開発がなされたとされ、鉱山関係に由来する白などが発見される地点もあり、修験者と鉱山との関連性をみることもできるのかもしれない。

4) 基本層位

層位は、3層に分層することができ、基本的に平成5年度の発掘調査で得られた見解と異なるものではない。I層は黒色土で、落葉などが堆積した腐植土で15cmから20cmを測る。II層は、ローム層と混在する漸移層と考えられ、礫が入り込んでいる。場所により異なることも予想されるが30cmから40cmを測る。III層はローム層であるが、軟質でしまりが弱い。遺物はI層下部からII層上面にかけて出土した。

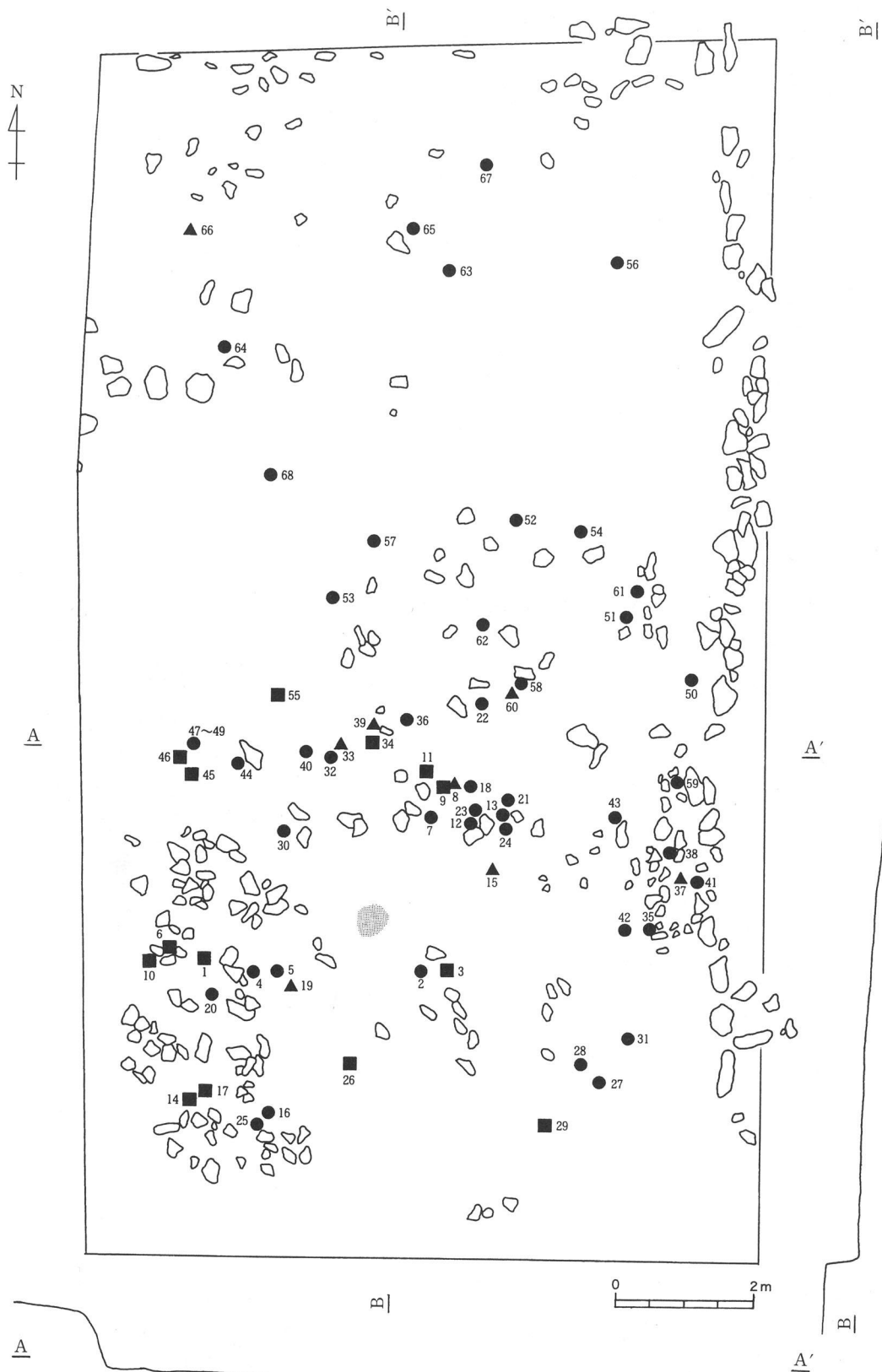


基本層位

2. 発見された遺物

1) 遺物分布

遺物の分布は、調査地区全体に分布し捉えにくい点もあるが、焼土が観察された範囲を中心に分布する傾向にあるものと思われる(第2図)。また、調査範囲の南側で分布が密になり、北側で数点の分布にとどまっている。しかし、散漫的であり意図的な集中は感じられない。また、礫についても意図的な分布は示していないものの、出土遺物と礫の分布は重なる感がある。礫についても何らかの意味があるものと考えられるが、本来から遺跡の範囲や周辺は礫が一般的に存在する地域であり、明確な把握は困難と考えられる。ただし、このような状況ではあるが、東側の南北方向に並ぶ礫は、平成5年の調査地点から続くものであり、参道とを区別した石積が崩壊したものと考えられる。また、南北方向に並ぶ礫から東側は、30cm程度の段差があり、その範囲において平成5年の調査において出土遺物もみられず参道と考えてもよいと思



第2図 遺物分布図 (1/80)

■ 陶器 ● 銭貨 ▲ その他

われる。東側の参道が明確化され、今回の調査区域には何らかの施設があったものと思われる。

2) 出土遺物

今回の調査で得られた資料は、銭貨46点、陶器片14点、土器片1点、小珠1点、キセル2点、鉄製品1点、海石1点、水晶片2点の合計68点であった(第1表)。以下、個々に説明していきたい。

遺物名	平成11年度	平成12年度	合 計
銭 貨	14	32	46
陶 器 片	9	5	14
土 器 片	0	1	1
キ セ ル	1	1	2
水 晶 片	1	1	2
鉄 製 品	1	0	1
海 石	0	1	1
小 珠	0	1	1
合 計	26	42	68

第1表 金峰山修験道遺跡出土集計表

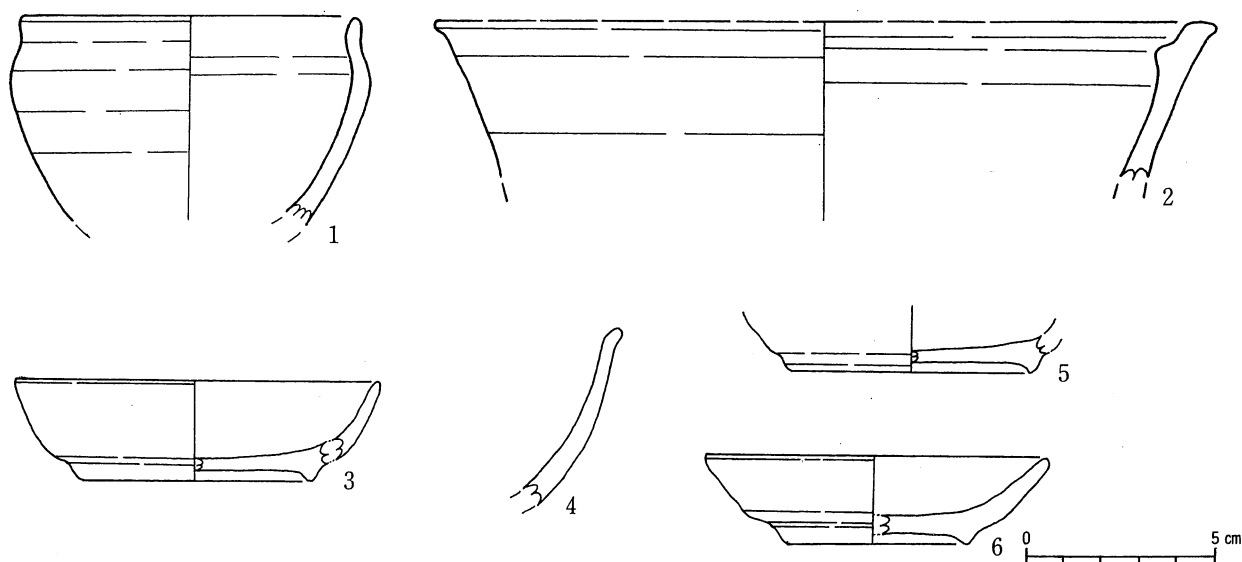
1 陶器片(第3図)

陶器片が14点出土し、個体としては6点と考えられる。尚、文章中の()内は注記番号を示す。

1(1)は、小形の碗で、口縁端部でややくびれ外面口縁部から内面にかけて黒褐色の釉に茶褐色釉が細かい斑点状に施釉され、口唇部のみに茶褐色の鉄釉が施されている。また、平成4年度の試掘調査で1号建物址より出土した陶器と接合し、16世紀中頃から後半の瀬戸・美濃系の製品である。尚、今回の出土地点と1号建物址との距離は約44mあり、比較的離れた地点での接合であり、何らかの意味を考慮することが可能なのかもしれない。

2(3・26・29)は、接合関係がみられないものの同一個体である。特に内1点は、平成5年度の発掘調査で出土した播鉢と接合した。全体に紫がかかった鉄釉が施され、口縁部の内面に三角形の凸帯が巡っている。今回の調査により17世紀前半の瀬戸・美濃系の製品であるとの教示を得た。

3(6+10・9+11)は、小形の丸皿で全体に灰色の釉が施されている。口縁部と底部からなり、それ



第3図 出土陶器観測図(1/2)(1・2は島田1994実測図を再掲)

ぞれ2点ずつの接合関係がある。しかし、両者は接合しないものの釉薬や胎土が類似しており、同一の個体として考えられる。16世紀中頃から後半の製品であるとのこと教示を得た。

4 (14+17) は、2点が接合し、口縁端部でややくびれる天目茶碗である。全体を黒褐色の釉に細かい灰褐色の釉が斑点状に施されている。17世紀前半の製品で、瀬戸・美濃系連房窯の製品との教示を得た。

5 (34+55) は、底部2点が接合し、丸皿と考えられる。全体に緑色の釉が施されているがむらがあり灰色がつよい。16世紀中頃から後半で、瀬戸・美濃系の大窯の製品である。

6 (45+46) は、2点が接合し、丸皿である。全体的に緑色の釉が施されているものの外面ではむらが認められる。16世紀中頃から後半の大窯の製品である。

2 土器片

土器片1点が出土した。無文で詳細については分からないが、15世紀から16世紀のものと考えられるとの教示を得た。

3 銭貨 (第4図1～18)

銭貨は46点が出土した(第2表)。開元通宝(第4図1)1点、宋元通宝(第4図2)1点、淳化元宝(第4図3)1点、咸平元宝(第4図4)1点、景德元宝(第4図5)1点、祥符通宝(第4図6)2点、祥符元宝(第4図7)2点、天聖元宝(第4図8)1点、皇宋通宝(第4図9)4点、熙寧元宝(第4図10)5点、元豊通宝(第4図11)3点、元祐通宝(第4図12・13)2点、紹聖元宝(第4図14)2点、政和通宝(第4図15)1点、

永樂通宝	6	景德元宝	1
熙寧元宝	5	天聖元宝	1
皇宋通宝	4	政和通宝	1
寛永通宝	3	宋元通宝	1
元豊通宝	3	開元通宝	1
紹聖元宝	2	淳化元宝	1
祥符通宝	2	咸平元宝	1
祥符元宝	2	不明	10
元祐通宝	2	合計	46

第2表 銭貨集計表

永樂通宝(第4図16)6点、寛永通宝(第4図17・18)3点、不明10点であった。不明であるものの中には、腐食がはげしく文字を読み取ることができないものの他に、小片のものや、前回の調査で島田が指摘している鋳写しのくり返しによるピタ銭(島田1994)も含まれているものと考えられる。初鋳年をみれば、621年から1636年におさまるが、銭貨の特徴として、流通期間が長く、遺跡の時期が明確化されない。また、遺物分布も、調査範囲全体に散在し、まとまりをみせない。ただし、前述した石積より東側の参道ではほとんど出土しておらず、今回の調査範囲に、何らかの施設あるいは、意味ある場としての利用があったことを示している。

4 小珠 (第4図19)

1点のみであるが出土した。縦13.6mm・幅11.9mm・厚さ11.9mmを測り、やや楕円形を呈する。ほぼ中心を貫く形で穿孔がみられるが、その穿孔は内部で円形を呈するものの外部では四角形に近い形状をなす。風化によるものと思われるが、白色をなす。1点の出土のみで不明な点もあるが、数珠等の珠と考えられよう。

5 キセル (第4図21～23)

21・22は同一の場所から出土した雁首と吸口である。おそらく同一に使用されたものと考えられる。雁首の方には竹製の羅字が残っており、その羅字は両端とも削られており、そのまま雁首と吸口が連結されそうな感がある。吸口は外圧を受けて変形している。

23は吸口のみが出土した。羅字との接続部分が段階的に太くなり装飾性をもったもので、22の吸口とはタイプを異にするものである。

6 鉄製品

腐食が著しく原形をとどめておらず、図示できなかったが、装飾金具の可能性があるかも知れない。長さ70.9mm・幅15.0mm・厚さ3.0mmを測り、薄く細長い形状を呈している。

7 海石（第4図20）

海石1点が出土した。小型の円盤状の小石で、よく磨耗している。遺跡周辺からは採集が困難であり、千曲川やその支流域から採集できる可能性があるものの、本遺跡外から持ち込まれたことは事実である。

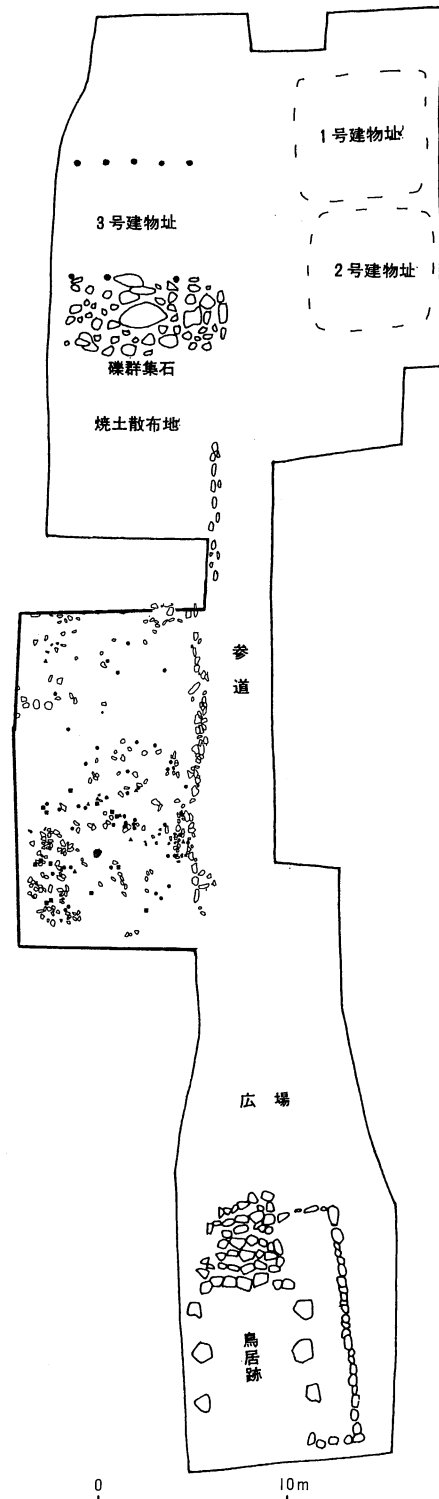
8 水晶片

水晶片が2点出土した。水晶は本遺跡の周辺地域で採集することが可能であるが、遺跡の範囲から通常に採取されることはなく、遺跡外から持ち込まれた可能性が高い。

3. ま と め

今回、以前から考えられていたテラス状の部分进行调查し（第5図）、多くの出土遺物を得ることができた。前回の調査部分から南よりで、一段高くなる部分であり、参道と考えられる部分よりも段がつく部分である。礫と出土遺物との関係も明確ではなく、きわだった遺構も見受けられず、この場所がいかに関係されていたか明確な判断はできなかった。しかし、礫の分布は参道と考える場所には少なく、その参道より一段高くなる部分に集中し、尚且つ段の部分に連続的に配置されているようであり、石積みの可能性もあろう。また、伝承によれば鳥居前に人々が集い、金峰山へ参拝登山をした例や、遺跡のすぐ南側を流れる大日沢より女人禁制であった例があり、鳥居前に祠やごく簡単な建物があったものと想像され、信仰上、意義ある場だったと考えられる。

遺跡の時期については、前回の調査と同様、陶器の製作時期に頼るしか方法はない。出土した陶器の製作時期は、16世紀中頃から17世紀前半の間に比定されており、15世紀以前の可能性はなく、戦国期から江戸時代におさまりそうである。前回の調査でも指摘されたように、戦国期の武田氏による金山開発や修験者との関わりも考えられ、川上村における、中世末から近世における、歴史解明に本遺跡や、金山関係遺跡が重要な位置を占めるものと思われる。



第5図 金峰山修験道遺跡全体図（1/400）
（島田1994 遺構全体図に加筆）

付表 金峰山修験道遺跡出土遺物一覧表

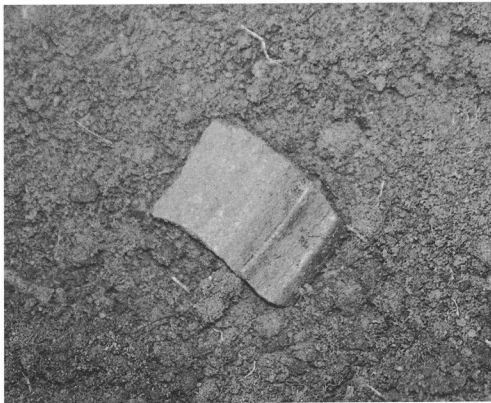
番号	遺物名	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備 考
1	陶器片	41.8	27.8	4.9	第3図1
2	銭貨	22.0	—	1.2	
3	陶器片	52.7	36.5	4.9	第3図2 26・29と同一個体
4	銭貨(□□元宝)	23.8	—	1.2	
5	銭貨(祥符通宝)	22.5	—	1.2	第4図6
6	陶器片	23.4	27.5	5.7	第3図3 10と接合、9・11と同一個体
7	銭貨(永楽通宝)	24.8	—	1.4	
8	キセル(吸口)	57.4	11.2	—	2点 第4図21・22
	キセル(雁首)	80.8	14.0	—	
9	陶器片	30.9	47.2	9.6	第3図3 11と接合、6・10と同一個体
10	陶器片	24.3	33.6	5.7	第3図3 6と接合、9・11と同一個体
11	陶器片	9.2	24.0	3.7	第3図3 9と接合、6・10と同一個体
12	銭貨(寛永通宝)	25.2	—	1.3	第4図17 裏に 文
13	銭貨片	—	—	—	
14	陶器片	32.8	31.7	6.0	第3図4 17と接合
15	水晶片	32.2	26.7	11.0	
16	銭貨(寛永通宝)	23.8	—	1.3	
17	陶器片	31.2	46.0	6.6	第3図4 14と接合
18	銭貨片(元豊□□)	24.8	—	1.2	第4図11
19	鉄製品	70.9	15.0	3.0	装飾金具?
20	銭貨(祥符元宝)	23.6	—	1.3	
21	銭貨(永楽通宝)	25.0	—	1.5	
22	銭貨(永楽通宝)	21.1	—	1.1	第4図16
23	銭貨(元祐通宝)	24.3	—	1.3	第4図12
24	銭貨(政和通宝)	23.7	—	1.3	第4図15
25	銭貨(寛永通宝)	24.1	—	1.4	第4図18
26	陶器片	33.0	26.8	11.7	第3図2 3・29と同一個体
27	銭貨(紹聖元宝)	23.6	—	1.2	
28	銭貨(永楽通宝)	24.8	—	1.6	
29	陶器片	48.4	33.2	13.4	第3図2 3、26と同一個体
30	銭貨(景德元宝)	23.9	—	1.4	第4図5
31	銭貨(熙寧元宝)	23.3	—	1.1	
32	銭貨片	21.3	—	1.6	
33	海石	21.0	17.0	7.0	第4図20
34	陶器片	22.4	17.4	9.9	第3図5 55と接合
35	銭貨(熙寧元宝)	23.8	—	1.2	
36	銭貨(元豊通宝)	23.8	—	1.1	
37	水晶片	16.4	14.1	3.5	
38	銭貨(祥符元宝)	24.3	—	1.4	第4図7
39	小珠	13.6	11.9	11.9	第4図19
40	銭貨	17.8	—	0.9	
41	銭貨(熙寧元宝)	23.1	—	1.4	第4図10
42	銭貨片	—	—	—	
43	銭貨(天聖元宝)	24.6	—	1.4	第4図8
44	銭貨(皇宋通宝)	23.9	—	1.0	
45	陶器片	27.3	24.8	9.4	第3図6 46と接合
46	陶器片	47.1	43.4	9.4	第3図6 45と接合
47	銭貨(皇宋通宝)	24.8	—	1.4	
48	銭貨(熙寧元宝)	24.2	—	1.4	
49	銭貨(紹聖元宝)	24.4	—	1.3	第4図14
50	銭貨(永楽通宝)	24.0	—	1.2	

付表 金峰山修験道遺跡出土遺物一覧表

番号	遺物名	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
51	銭貨（熙寧元宝）	24.6	—	1.3	
52	銭貨（祥符通宝）	22.2	—	1.2	
53	銭貨（元祐通宝）	24.1	—	1.2	第4図13
54	銭貨（宋元通宝）	24.3	—	1.3	第4図2
55	陶器片	37.9	51.1	9.8	第3図5 34と接合
56	銭貨（開元通宝）	23.9	—	1.2	第4図1
57	銭貨（咸平元宝）	23.6	—	1.4	第4図4
58	銭貨	24.7	—	0.9	磨耗著
59	銭貨	24.6	—	1.2	
60	土器片	26.8	27.6	10.3	
61	銭貨（皇宗通宝）	24.3	—	1.1	
62	銭貨	—	—	—	
63	銭貨（元豊通宝）	23.0	—	0.9	
64	銭貨片	—	—	—	
65	銭貨（淳化元宝）	22.3	—	1.2	第4図3
66	キセル	63.2	11.0	—	第4図23
67	銭貨（永樂通宝）	24.7	—	1.4	
68	銭貨（皇宗通宝）	23.9	—	1.4	第4図9

※番号は遺物分布図の番号と一致する。

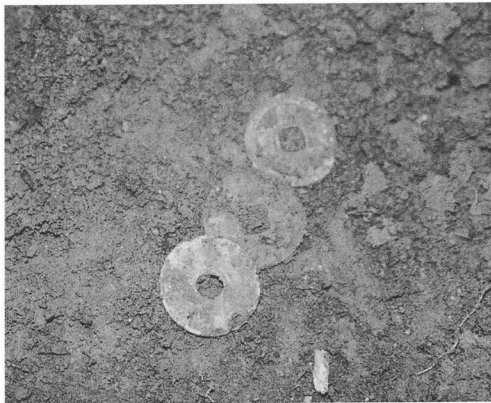
図版 1



陶器片出土状況



陶器片出土状況



錢貨出土状況



錢貨出土状況



キセル出土状況



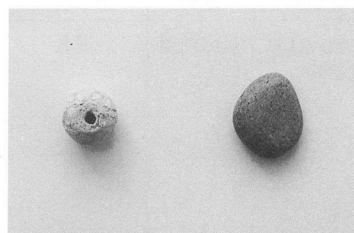
小珠出土状況



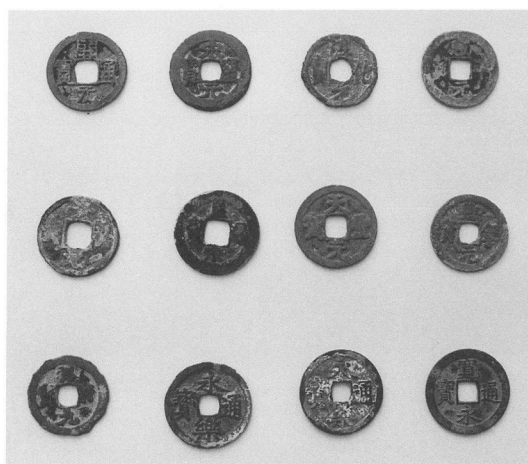
陶器片



キセル



小珠・海石



銭貨



旧小河川試掘状況

報告書抄録

ふりがな	きんぼうさんしゅげんどういせき(へいせい11ねんど～へいせい13ねんどはくつちようさほうこくしょ)								
書名	金峰山修験道遺跡(平成11年度～平成13年度発掘調査報告書)								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	長崎 治								
編集機関	川上村教育委員会								
所在地	〒384-1405 長野県南佐久郡川上村大字大深山532 Tel0267-97-2600								
発行年月日	平成13年 3月20日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
きんぼうさんしゅげん 金峰山修験 どういせき 道遺跡	かわかみむらかわ 川上村川端下	398-156番地	21	9	35° 55' 42"	138° 38' 39"	1999.10.21 } 2001.10.24 (11日間)	180m²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
金峰山修験 道遺跡	信仰関連	近世		銭貨、陶器片、小珠、 鉄製品、キセル					

金峰山修験道遺跡

(平成11年度～13年度発掘調査報告書)

平成14年 3 月20日 発 行

編 集 川 上 村 教 育 委 員 会
発 行 長野県南佐久郡川上村大深山532
☎ (0267) 97-2600

印 刷 ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎ (026) 244-0235(代)
